

兒童と金錢

黒田定治

▲中流以下の家政 兒童と金錢と言ふ問題は、今から十五六年前に、帝國教育會會員の間に、そんな問題が起つて、委員まで設けて研究した事があつた、確かに記憶して居ないが、何でも金を持たせるのは必要だ、と言ふ事になつたやうに覺えて居る、其理由は失念して了つたが實際から言ふと、中流以上では先づ金を持たせぬ方が、多いやうだ、又それで十分足りるのである、所が、中流以下の家庭になると、其の生活状態からして、勢ひ金を持たせなければならなくなる、それは敢て利害得失など、言ふ事から割出されたのでは無くて、實際の境遇が然らしめるのである

▲便利な方法 下流の家庭を見ると、概して両親共に、終日手を明けて居る事が少ない、父親は其日の業務に忙しく、母親とても同様に手内職を爲なければ、またそれ相應に家事に忙殺される、斯

う言ふ有様であるから、到底吾が小兒の御機嫌を取つて、緩り遊ばしてやると言ふ事が出来ない、そのみならず小兒が菓子などを欲しがらない、も、それに應ずる菓子や果物の貯へはまづ無いと言つて差支ない、仕方が無いから金を遣る、これは下流にあつては頗る便利な方法で、小兒にも満足と與へ、亦親にとつても業務の妨げにならない

▲生活上から來る差異 それに小兒も自分の相手をし呉れる者は無いし、仕方が無いから、獨遊をびする、飽きる、何か食べ度くなる、強請る、金を貰ふ、と言ふ順序で、唯一の樂みとも言ふのは自然菓子や團子などを買ひ食ひする事に歸着する、若し此時に金錢を遣らなかつたら如何であらう、駄々も捏ねるし、獨遊びもしなくなつて、自然に親の仕事の邪魔になる、そればかりでなく、妙に心が捻れて途ひには、他人の家で菓子を強請つたり或は菓子屋の店の物に手を出す事にならぬとも限らぬ、詰り下流社會の小兒が金錢を強請るのは、中流以上の小兒が直接、菓子や果物を強請るのと同じで父母が金錢を與へるのは、直接菓子や果物

を與へるのと少しの違ひもない、唯代價を以てするのと、實物を以てするのと、これだけの相違で實質に於いては、決して異なる所はない、これ等は單に生活上から來る一つの差異である

▲知人の經驗 元來小兒は日々二三度、食欲を來たすのは、普通の事であつて、小兒の通有性である、之れには上下貴賤の差別は勿論無い、若し此の要求に應じなかつた場合には前にも言つた通り心が曲つて人の物に手でも出すと言ふやうな卑しい根性となつたり、延ひては悪い行爲をする様な結果を生じはしまいかと思はれる、自分の知人で勿論菓子貯へて置く程の餘裕もなかつたが、極めて嚴格な人間で或時某學校の教師から、小兒に金錢を與へるのは、宜しく無いと言ふ事を聽いて一文も金を遣らない事に爲て了つた、所が其小兒は妙な根性に爲つて了つて、悪い事をも仕兼ね無い有様となつた、それを爲めに同氏も非常に後悔して今尚ほ其矯正に努めて居る、要するに下流の家庭にあつては、小兒に金を持たす、と言ふ事は生活上の必要ばかりでなく、小兒の道德上にも

大なる關係があるものである。

▲人生と金錢 以上話した所は、單に家庭の階級上から、菓子などを買ふ爲めに金錢を持たしてどうかと言ふ、單純な事を言つたのであるが、更に廣く教育上から、一般の兒童に、金錢を所持さしてどうか、と言ふ事を話度いと思ふ、昔はいざ知らず、今日の世の中は、人生と金錢此の二つは密接の關係を持つて居る、金錢を離れて、人生無しと言つても差支ない、それを中には小供などに金錢を持たせる必要が無い、取扱はせる必要が無いと言つてる者もある、併し小兒の時に、金錢取扱上相當の訓練、練習を爲して置かなければ、一朝自ら金錢を自由にする時が到達しても、其締括りが付かない事になる、其結果として、遂ひには一家の維持も出來なくなつたり、又は會社、銀行、或は商店の雇人となつても融通の生かぬ人間、詰り役に立たぬ人間が、出來上りはしまいか、自分此點からして、適當な時期が來たならば、金錢を持たせる必要が有るやうに思ふ、併し茲に斷つて置き度いのは、持たせると言ふのは、妄りに

與へて、妄りに費はせると言ふのでは無く、金錢其物の取扱方を、知らしめる、と言ふ意味に外ならないのである、

▲十二三から小遣錢 其適當の時期と言ふのは、幾つ位かと言ふと、大凡七八歳頃からである、此の年頃になれば、一錢銅貨であるか、二錢銅貨であるか、の見分けも付くやうになるし、少し位の算用も出来て来るから、錢を持たして、使などに遣るのも至極宜しい、それから九歳以上にもなれば、學校でも金錢の計算を盛に、教へられるから小兒も自然、金の計算に興味を持つて来て、金錢を取扱ふのを悦ぶやうになる、併し始から難かしい取扱などを爲せるのは無理であるから、徐々に進ませなければならぬ、最初は釣錢の要らぬ買物から、始めて、漸次釣錢の有るやうなものに移らして、其釣は幾ら來筈と、容易に計算の出来るやうなものに進ませる、それから十二三、尋常小學校五六年位になれば、小使錢を遣つて、自由に使はせて、これは勿論條件付で、十分監督をして、正しい取扱方に慣れしめるのである、併し前に

も言つた通り、家庭の事情に依つては、今少し早くから持たせるのも宜いと思ふ、
▲教育と練習 尋常小學を終へて、それ以上の教育を受けたい者は、直に世に出で、働かなければならぬのに、世間に出で最も直接に、最も頻繁に關係の有る金錢の取扱方が出来ないやうでは、國民教育の上から言つても不都合な事である、又小學校の教授の上から見ても、どんな學科の教授でも實地と結付けて、教授し練習さして、社會に出でから直様役に立つやうに、準備してやるのが、教育者の任務である、それを算術などは盛んに金錢の計算を教へて置きながら、實地の練習と結付けないで、實地金錢の取扱をさせないのは、教授の任務を缺いて居りはしまいか、併し中流以上の子弟で中等以上の教育を受ける小兒は、前の小兒と比較して、金錢の取扱を教へるのは少し遅れても宜いと思ふ、以上の話は畢竟、終始金錢に近づかして置いて、そして卑しい心を起さず、鷹揚な小兒に育て度いと思ふ、自分の考へである、併し金錢を扱はして、必ずしも害が無いとは言へぬ

場合が有る、それは小児の性質如何に依るもので、悪性の小児などは最も注意すべきで、家庭の注意と監督が最も大切である

幼稚園に就きて

佐々木吉三郎

第一 幼稚園の任務

世には幼稚園設立につきて、疑を抱けるものがある其幼稚園は必要であるか又不必要であるかと言ふことを考へるのに家庭さへ理想的に完全にあれば幼稚園は不必要であると言ふが私は之に對して必要であると思はれます、而して其幼稚園は如何なる場合に於て必要であるかと云ふことを考へて見ると先づ其理由は悉くの家庭の子女を入れる爲めに必要であるか又或家庭に限りて必要であるかと言へば私は其或家庭に對して必要だと思ふ、幼稚園は義務教育的になすの必要はない、家庭が

理想通りであつたならば志望者も少いが理想通りにならないから之を補ふ爲めに必要である。家庭に在りては財制上或は職務上又は地位上よりして終日子女の教養に盡粹することが出來ぬことがある。然らば其幼稚園の任務とする所のものは如何と言へばそれは次の如くである、今少しくお話をしてみませう、幼稚園と云ふことは、フレイベル氏の始めたもので氏が之を考へ出したるときはあゝこれほど良いものはないと言つて嬉ばれたとの事であるして字の示せるが如くに物を教へ込む所ではなくて、幼児が自然に有せる性質の表はれ來る其を利用して順當に延ばしてやるだけのものだからこれを教ふるではない。フレイベル氏は、自分は子供に教へるのではなくて兒より習つて之を他兒に告げてゐるだけのことであると言つてゐる。斯くの如く幼児の天賦の性能と其方向とを曲げることなくして直ぐに延ばす之が即ち幼稚園の任